

我が恩師の思い出—その2

学長 植木 宏明

前回この機関誌で記したように、私には恩師と自慢でき、尊敬できる師が数人いるが、谷奥喜平先生（日本研究皮膚科学会初代理事長、元岡山大学教授）、野原 望先生（元岡山大学教授、附属病院長、日本研究皮膚科学会理事長）は既に逝去されている。もう一人の Otto Braun-Falco 先生（ミュンヘン大学名誉教授）〔Figs. 1, 2, 3〕は85歳を越えてなお、矍鑠とされている。しかし、年月が経つと共に、3人の巨人の名前を知らない世代も増えてきた。

Braun-Falco 先生は、ミュンヘン大学の名誉教授で、かつては世界皮膚科学会の会長であり、この領域では世界の頂点に君臨して、まさに帝

王のごとき存在であった。ちょうど同時期にサッカークラブ FC Bayern（ミュンヘン）の帝王 Beckenbauer と比較されたものである。弟子の中から19人の教授が輩出され、ドイツやスイスあるいは世界各地の大学や大病院で指導者として活躍している。ちなみに、ミュンヘン大学皮膚科の歴史の中には von Zumbusch 教授、Alfred Marchionini 教授等忽々たる巨人達が輝いている。現在既に Marchionini 国際賞、Braun-Falco 学術賞等があり、受賞することは大きな栄誉となっている。1995年1月、私は日本人として初めて Alfred-Marchionini Gedächtnis-Vorlesung を受賞し、Hamburg で受賞講演を行った。

さて、私は1963年頃、当時の東大伝染病研究所（今の東大医科学研究所）に内地留学の機会を与えられ、蛍光抗体法の手技を習得した。母教室に帰ってから、早速、塩析、DEAE cellulose column chromatography による抗体蛋白質の精製、FITC（蛍光色素）の標識、更に精製して臨床応用した。SLE 血清中に初めて、抗核抗体を証明して、暗闇に蛍光を発した細胞核を観察して興奮したものである。日本では臨床方面



Fig. 1. Braun-Falco 教授夫妻（1990年代）



Fig. 2. Marburg の日独皮膚科学会での再会（2001年6月）



Fig. 3. Hofbräuhaus での懇親会の余興（1990年代）

への応用はまだなかったようである。当時は免疫グロブリンという概念もなく、抗体活性が γ -globulin 領域にあるということが判明した頃である。したがって、まだ IgG, IgA, IgM, IgE, IgD という命名もなされていなかった。予研の石坂公成博士が Prausnitz-Küstner 反応を応用して reagin (後の IgE) の研究を精力的になされていた頃である。

当時、組織化学的手法で皮膚内成分の酵素などを精力的に研究していた Braun-Falco 教授 (ミュンヘン大学皮膚科学教授) と別冊の交換等をしていたところ、皮膚内の免疫反応を電子顕微鏡レベルで観察しようということで誘いが掛かり、ついでには旅費、滞在費などを申請するために、取りあえず Alexander vom Humboldt Stipendium を受けたところ合格してしまった。急にミュンヘン大学へ留学することとなったわけである。当時はまだ外貨の持出しは制限されていたので、直接現地でドイツマルク (DM) が頂けたことは有り難かった。そして、1969年7月に羽田空港発の Lufthansa 機で、アンカレッジ、ハンブルク、フランクフルト経由でミュンヘンに着いた。

その当時、Braun-Falco 教授配下の皮膚科教室は、60名を越える医師、研究技術員で、200名の入院患者、地上6階地下1階のビルを擁し、臨床面では皮膚科学一般に加え、allergy, androgen, plastic surgery, collagen disease, proctology 等の患者を広範囲に診療しており、この領域では文字通り世界皮膚科学界の頂点にあった。Prof. Petzoldt (後年→Heidelberg 大学教授), Rassner (→Tübingen), Christophers (→Kiel), Marghescu (→Hannover), H. Wolff (→Lübeck), Plewig (→Düsseldorf → München), Burg (→ Würzburg → Zürich), Ring (→ Hamburg → München), Schill (→ Giessen) 等が活躍しており、数年後には Krieg (→Köln), Meurer (→Dresden), Ruzicka (→Düsseldorf), Bieber (→Bonn), Landthaler (→Regensburg) 等が加わることとなる。そして、驚いたことに弟子達の専門テーマがそれぞれに異なっていた。臨床面は上記皮膚科の全領域を

習得して患者サービスに努めるのであるが、日本での10年分の症例が1-2年で経験できるのである。しかし、皮膚疾患については、日本人とドイツ人とでは皮膚の色 (メラニン量) が異なり、日本人で日常的に黒色調のものがドイツ人では黒くなく、毛細血管が拡張して紅く見えたりして戸惑うこともあった。しかし、慣れてくると本質的には同じであることもわかった。そして、Braun-Falco 教授の教室での基本姿勢、指導方針は極めて明快であった。

すなわち、

1. すべての教室員は出勤時間、仕事開始、回診、カンファレンスなども完璧に時間厳守である。報告なくして遅刻、欠席などすると、皆の面前で罵倒され、嘲笑された。
2. 仕事、内容は単純で実際のであった。すなわち "einfach und praktisch!" である。複雑で弁解がましいことは意識的に排除された。このことは研究面についても、教室員が公的な場でクドクド説明していると、一喝された。毎日もたれる患者供覧では患者を診察した後、医局員は所見の取り方、診断、治療まで、皆の前で厳しく質問され、間違えたり、オタオタしたりしていると、何年研修しているのかと、詰問されるので、地位に関係なく、全員緊張した真剣勝負の時間であった。
3. 外国からの客人は毎週のごとくあるが、教授の隣の座席が好意的に与えられ、ここでも客人に対して、根掘り葉掘り質問される。質問し、厳しく議論することこそが、客人に対する最高の親切であり、もてなしであった。

ここで紹介された客人の何人かは、その後私にとっては貴重な得難い友人となった。Prof. Cormane (Amsterdam, 故人), Prof. Jablonska (Warszawa), Prof. Beutner (Buffaloo), Prof. Ackerman (New York), Prof. Wolff (Wien), Prof. Thivolet (Lyon) 等世界的な著名人であった。ほとんどの人々とは国際学会などでも度々再会し、後年、倉敷まで訪ねてきてくれた。

私はもともと世界史に興味があり、ミュンヘン滞在中に各地を訪ねることができた。イタリア、ギリシャ、ポルトガル等は歴史的遺産の宝庫でもある。また、Braun-Falco 教授の紹介で各地の教授を紹介され、多数の講演旅行をしながら、観光もできた。

肝心の研究は、皮膚内の免疫複合体を膠原病や Arthus 反応部位で電子顕微鏡下に観察することに初めて成功し、幾つかの論文にまとめ発表でき喜ばれた。教授のかつての研究面での専門は、酵素組織学であり、皮膚内での種々の酵素の局在を既に1960年代に追及されていたが、後年（1991）、私共が serendipity として、その中の一つである carbonic anhydrase に対する自己抗体を発見することになろうとは思ってもよらなかった。このことを報告した時には芯から喜ばれた。この自己抗体は20年経過した現在、Sjögren syndrome, SLE を初めとして各種の collagen diseases, autoimmune pancreatitis, autoimmune cholangitis, endometriosis, type 1 DM 等でも報告されることとなった。

Braun-Falco 教授の私生活は地味であり、奥様想いであったが、仕事は日曜日も出勤されることがよくあった。ちなみに奥様は結婚後に小児麻痺を発症され、車椅子生活で50年以上にわたって親切に介護されている。倉敷まで車椅子を押して訪ねて来てくれたこともある。後年、昭和天皇の時に申請した日本国の勲章が授与されることになり、Bonn の日本大使館で時の宮沢大使から直接に手渡され、喜んでいただけた。

川崎医大を定年退職後、私共は再びミュンヘンに滞在したが、Braun-Falco 教授を始め、多くの同僚と旧交を温め、再び深めることができたことは、私にとっての大きな喜びであり、感謝となった。すべては恩師との出会いから始まった。